

いしづち

2022.7

JULY

No.147



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>

道後温泉の源泉について（大正時代後編）

世界建築紀行 ミャンマーの仏教建築紀行 バガンとヤンゴンの“パゴダ”

委員会活動報告 こどもと建築をつなぐ絵本



- | | | |
|---|---------------------|---|
| 1 | 道後温泉の源泉について（大正時代後編） | 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……①
一級建築士 野本 健……① |
| 2 | 世界建築紀行 | ミャンマーの仏教建築紀行 バガンとヤンゴンの“パゴダ” 西予支部 松山 清……⑤ |
| 3 | 委員会活動報告 | 文化財・まちづくり委員会より 文化財まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……⑪
こどもと建築をつなぐ絵本 青年委員会 委員長 和田 崇……⑫ |
| 4 | けんちくの輪 | 仕事と農業との両立 松山支部 菅野 林次……⑬
苔に夢中 宇和島支部 藤井 英樹……⑭ |
| 5 | お知らせ | 第1回理事会概要報告 事務局……⑮ |

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



文化財・まちづくり委員会主催「景観写真コンテスト」
特賞（審査委員長賞）
「旧東洋紡績赤レンガ倉庫」
杉山博司氏（八幡浜支部）
撮影地：八幡浜市保内町

景観と聞いてすぐ思い浮かべたのが、保内町の宮内川にかかる
みなせ
美名瀬橋から見た旧東洋紡績（川之石工場）でした。

このすぐ近くには旧白石和太郎邸や愛媛蚕種、西のおやけといっ
た、愛媛の産業界をリードした建物が現存しています。

それぞれの個性が線として結ばれ、面をなし、人々の生活や産
業、経済といった将来に繋がる地域構成を造り上げ、往時がしの
ばれる空間となっています。

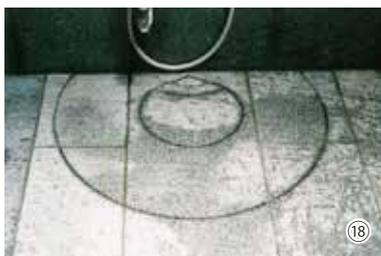
当地の誇るべき景観です。（八幡浜支部、杉山博司）

5 源泉跡の再保存

この源泉跡の遺構は、現在進行中の保存修理工事完了後は、再び浴槽底石の下に埋められるので、蓋の板石などは正しく旧状に復し、現況のまま保存することにした。この源泉跡については関係者協議の上、神の湯源泉跡（写真⑰・⑱）に倣って、浴槽底石に養生湯源泉跡の位置に直径730φの円形で位置を記し、中央に第1号源泉跡と同じマークを刻み（写真⑲・⑳）、浴客にわかるように、また後世に語り継ぐために表示することとした。



写真⑰ 神の湯源泉跡の表示と説明プレート
(神の湯本館：神の湯男子浴室)



写真⑱ 養生湯源泉跡の表示
(南棟：霊の湯女子浴室)



写真⑲ 養生湯の源泉跡の接写



写真⑳ 養生湯女子浴室（大正13年以前）

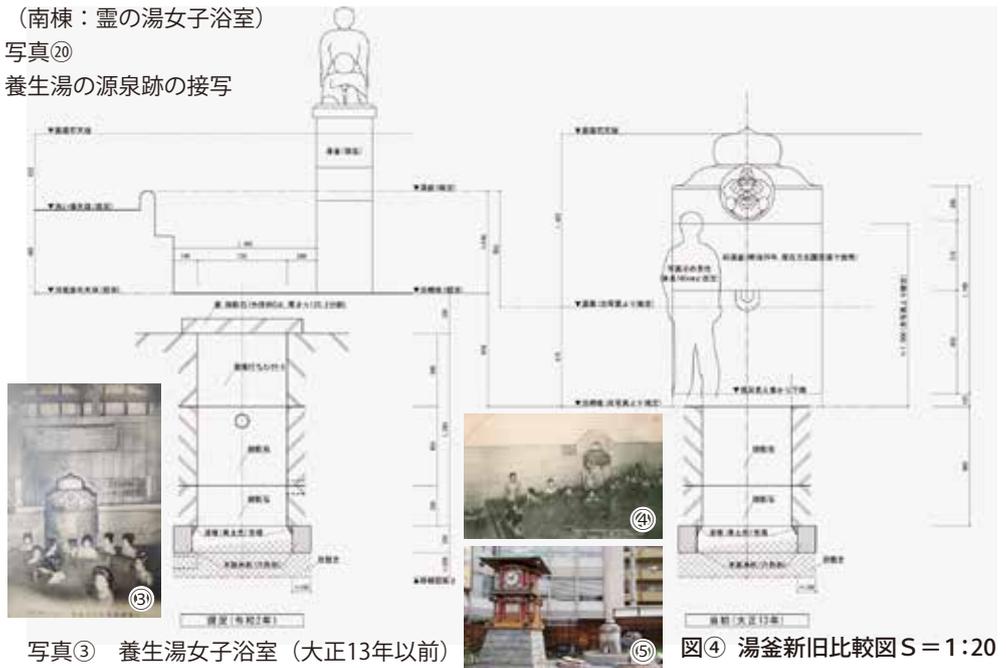
写真⑳ 養生湯男子浴室（昭和29年以前）

写真⑳ 放生園に移設され足湯の湯口として使用されている旧養生湯の湯釜

6 調査結果、古資料に基づく考察

(1) 旧湯釜の据え付け高さ調査結果を基に、現況断面図を作成した(図④-左)。次に、古写真(写真③・④)の基礎石の高さを基に旧湯釜を書き込んだ図面を作成した(図④-右)。写真④の湯釜左に立つ男性の身長を160cmと仮定し、浴槽の底を想定すると、御影石の円筒の上段の上端と一致することが確認できた。これは現在の浴槽底石より930mm低かったことになり、大正期の平面図で、階段を数段下りて浴室に至っていたことと一致する。放生園の見え掛かり部分の下部に105mm石が伸びているとすると、この御影石の円筒の上に直接湯釜が据えられていたことになる。

今回発見された湯釜跡のうち、最上部のコンクリート部分は、円筒の御影石との落差を埋めるために昭和29年の改築時に打設されたものと考えられる。



図④ 湯釜新旧比較図 S=1:20

写真③④⑤は前編(5月号)に掲載

(2) 記憶を辿る養生湯の様子

①高木輝夫氏（伊佐庭如矢頭彰実行委員会発行「道後で暮らす語り部の記憶」平成26年）の記憶によると、「…養生湯はわしらが子どものじぶんはまだ下から湯が沸きよったじゃけんの。養生湯は入口の方が女湯じゃったんよ、奥の方が男湯やったんよ。夜中になって12時になったら湯がきれいに抜けたら湯番さんが砂を上下ひっくりがえすん。汚れとるじゃん。…」とある。浴槽の底は砂敷きであったこと、閉館後は湯を抜いて掃除をしていたことなどがうかがえる。

②小崎 尚氏（松山市岩崎町在住、昭和15年生まれ）の小学校の頃（昭和25年前後）の記憶によると、養生湯の底は砂（小さな石）敷きであった。父親に言われて湯釜の付近を掘って足を入れてみると、溜まっているお湯より温度の高いお湯が湧き出してくるのを感じた、とのこと。湯釜の底からお湯が沸きあがってくる途中、湯釜の石の継ぎ目などの隙間からお湯が底に敷かれた砂に湧き出していたとみられる。

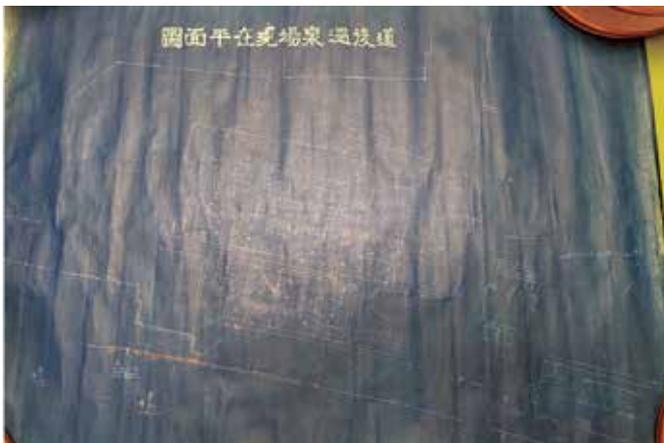
(3) 古図面より読み取れること

松山市には「道後温泉場現在平面圖」が保管されている（写真②）。作成時期、目的は不明であるが、明治25年（1892）建築の養生湯が書かれていること、昭和2年（1927）建築の鷺の湯の場所が「鮎屋」となっていることから、この間に作成されたものと思われる。

【1】 養生湯源泉からの給湯配管

図面は、書かれた線が白、周囲が青の、現在の形式のものとは色が逆転した青写真である。壁や浴槽、階段などが単線で書かれた平面図であるが、神の湯源泉と養生湯源泉からの給湯配管が記入され、青焼き後に赤で追加の配管が書かれている。当初書かれた線より、神の湯源泉と養生湯源泉が配管でつながっていたこと、又新殿北庭に据えられている湯釜の下の部分にも配管されていることが確認できる。さらに注目すべきは、本館の南西方向の建物に向って2本の配管があることである。ここには鮎屋旅館があったことが、明治30年ころの写真（写真③）や、道後温泉絵図（明治28年・写真③）によりわかっている。

その部分の図面の文字を詳細に解読すると、・鮎屋第一号井戸 第二号源泉（養生湯源泉）ヨリ51.0尺巨（？）養生湯槽底砂面□此井戸ハ高低差16尺・鮎屋第二号井戸 第二源泉ヨリ50尺と書かれていることが読み取れる。古くからこの場所に鮎屋旅館があったが、移転後の昭和2年にこの源泉を利用して鷺の湯が建てられたと思われる。図面には、上記の配管がそれぞれを結ぶ直線で書かれている。源泉跡から確認された外部への配管とは向きが必ずしも一致しないが、図に示された配管であることは十分に考えられる。



▲写真② 保存されている古図面（明治25年～大正13年）



▲写真③ 明治30年ころの古写真



▲写真⑳ 明治28年の道後温泉絵図

【2】玄関棟で見つかった縦型の陶管

今回の工事で、中央廊下から西側屋外への排水管の更新のため、玄関棟の床を解体したところ、3か所のピットが見つかり、その間を複雑につないで排水経路が確保されていることが確認できた。その中の東端、旧養生湯の北西隅あたりのピットの中に、内径約400φの陶管が縦に設置されているのを発見した(写真㉔・㉕)。現在は使われておらず、はっきりとした用途は不明である。数本の配管が確認でき、特に中央廊下(東)に向って保温措置が施された配管が残っていた。給湯配管を分岐するために使われていた可能性もある。古図面では前述の赤で書き加えられた配管も見受けられる(消えかかっていて経路を特定できない)ため、他資料の搜索など、今後の研究が待たれる。



▲写真㉔ 玄関棟で発見された縦に置かれた陶管



▲写真㉕ 陶管の詳細

【3】古図面欄外の付図とメモ

古図面の右下に平面図を書き足したものが見て取れる(写真⑳)。壺室、式室、三室(神の湯)の南に養生湯が男女別にあり、西北には牛馬湯が描かれ、その上方に「明治式拾年頃 記憶ヲ辿…」とのメモ書きがある。養生湯の位置の浴室は、明治25年に建て替えられた前身の建物と見られる。男女の浴室が南北に並び、それぞれに湯釜らしきものが設けられている、牛馬湯の位置や大きさなど、当時の様子がわかる「貴重なメモ」とみることができ



▲写真⑳
古図面の右下の一部「明治式拾年頃 記憶を辿…」の字が読める。

7

報告書の作成

この調査は、保存修理工事工程上の制約があり、建築当初の姿の特定には至らなかった。しかし、松山市や工事関係者のご協力により、現況調査や関連資料から得た考察は有意義だったと考えられる。以上、調査結果を図面、写真とともに編集し、調査結果の報告書といたします。

■まとめ

花岡氏の調査報告から道後温泉の源泉がどのように汲み上がり、配湯されていたかがよくわかる。

今までは神の湯が多く取り上げられてきたが、町民に愛されてきた養生湯は全くと言っていいほど注目されてこなかった。今回の調査報告は道後温泉がどのような歴史を歩んできたか知ることのできる大きな手掛かりとなるように感じる。

また、故河合氏が記した神の湯の第1号源泉跡を河合氏の事務所に勤めていた花岡氏が養生湯の第2号源泉跡に記したことは時を超えた師弟関係を感じ、大変意義深いものと感じている。第2号源泉跡は霊の湯女子の浴槽で見ることができるので、是非楽しんでいただければと思う。

■あとがき

今回は主に大正時代の道後温泉の源泉について執筆させていただいた。道後温泉の増湯計画のはじまりであり、多くの人々に忘れ去られないよう、まとめさせていただいた。今後新たな知見が得られた場合、50年後、100年後の人たちに加筆修正していただきたいと願い筆を置く。

■参考文献

- 「道後温泉 増補版」 「海南新聞」
- 「愛媛県紳士録」 「道後で暮らす語り部の記憶」
- 「道後温泉の研究 重見辰馬」
- 「湯の町道後隅々案内」
- 「富田喜平は語る」
- 「二神鷲泉と道後湯之町」

*本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

ミャンマーの仏教建築紀行 バガンとヤンゴンの“パゴダ”

西予支部 松山 清



◀ バガン高原に
点在するパゴダ

1 仏教の国ミャンマー

2021年2月1日に軍部のクーデターが起きて軍が国を統治する前は、ミャンマーは活気のある東南アジアの仏教国の一つだった。日本からはANAの直行便路線が開設され気軽に訪問することができ、将来の経済発展が期待されていた。

ミャンマーはかつてビルマと呼ばれて、シナイ半島西側のベンガル湾に面しており、首都も現在の“ヤンゴン”ではなく“ラングーン”だった。ミャンマーの古都バガンが世界三大仏教遺跡の一つであることを2018年のアンコールワットの旅で知り、インドネシアのボロブドゥールと共にこの地を訪問リストに加えて、2019年3月23日にバガンとヤンゴンに向かった。

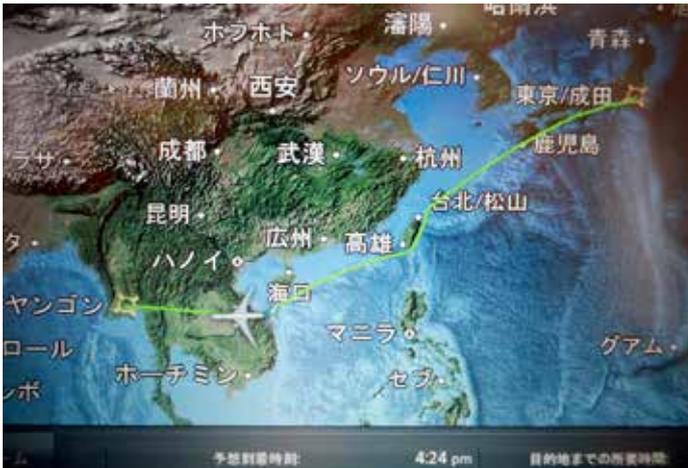
ミャンマーはこれまで訪問した国の中では最も敬虔な仏教国で、当時は仏教があまりにも日常生活と密接であるためバガンの仏教建築の修復は歴史的考

証などに基づかず、いい加減に行われていたため世界遺産にはなっていなかったが、帰国直後の2019年7月に登録された。そのため、バガン平原に3千はあろうかと言われているパゴダがサバンナに林立する姿に胸が高鳴った。

2 ミャンマーへの旅路



▲ 雨の成田空港から旅立ち



▲ヤンゴンへの飛行ルート

ヤンゴンへは成田から直行便で行くことができ、午前11時出発で夕方16時半に現地着。5時間半のフライトだ。この便に搭乗するためには松山から前日のうちに成田へ移動して空港近くのホテルに前泊、翌朝出発の3時間前に空港へ向かった。生憎天気は悪く、雨に曇る滑走路に出発を待つ飛行機が何機も列を作っている中の旅立ちとなった。

ヤンゴン到着後は市内中心部のホテルへ向かい、周りを散策し夕食を食べた。住民が屋台の前に椅子を並べて食事をする様子を見ながら、治安も良いのでスーレー・パヤーへ行ってみた。スーレー・パヤーはライトアップされ、ロータリーの中心で仏塔が美しく金色に輝いていた。



◀スーレー・パヤーの夜景
▼屋台で賑わう通り



3 古都バガンを訪ねる

24日早朝の飛行機で、ヤンゴンの北約500kmのバガンに向かった。まずパゴダを見に平原の小高い丘に登って、ついにバガンへやって来たという旅情に浸っていると、二人の小坊主さんが坂道を登ってくる。彼らもこの景色を見るのかと思いきや、お布施を懇願してきた。仏教の修行の一つで、人々から施しを受けるのだという。そんなことが他にも何度かあった。



▲住宅とパゴダが共存



▲修行中の小坊主さん



小型のパゴダ ▲
馬車でのパゴダ巡り ▶



サバンナのような平原の中には、いくつものパゴダがあった。パゴダは「釈迦の住む家」という意味で、内部には釈迦の座像などが納められていた。そのため、お釈迦様があっちにもこっちにもいる、ということになるが、パゴダを建てることは「人生最大の功德」と考えられていて、そのためこんなにたくさんのお釈迦建築が存在することになった。



▲ シュエズイーゴオン・パヤー

バガンでは馬車で仏塔巡りをするのも人気だが、3月は1年中で最も暑い時期だったため、車で巡る私にはかなり大変そうに見えた。

バガンは仏塔建築巡りがハイライトかつ主役で、パヤーも忘れるほどたくさんの荘厳なものが存在していた。なかでも代表とされるのがシュエズイーゴオン・パヤーで、平面形状や中心部の金の塔のバランスなど他にはない美しさが見られた。

歴史の教科書にも登場してきたアーナンダ寺院はバガンにあった。とても規模が大きくて、プロポーションも素晴らしい。ミャンマー様式の建築を代表するこの仏塔は11世紀に建設されたものだ。なんと駐車場で瀬戸内バスを発見！愛媛県からこの地に再就職したのだろうか、ミャンマーと日本の、歴史と繋がりを感じた。



▲ アーナンダ寺院
◀ 瀬戸内バスが活躍



▲ ニャウンウー市場



▲ 賑わう一面の野菜売場

パゴダ巡りの途中、バガンの暮らしを知ろうとニャウンウー市場を訪ねた。そこでは女性が野菜や魚、雑貨など多種なものを販売して活気に満ちていた。しかし、1m位あるような淡水魚のぶつ切りや、頭だけ切り落とした鶏などが平然と並べられており、習慣の違いを知る。ここでは女性たちは皆ほおに白い“タナカ”と呼ばれる樹粉を塗っていて、化粧や日焼け止めに使っていた。市場でも小坊主さんたちが熱心にお布施を集めており、仏教国の慣習のためか人々は抵抗なく賽銭を手渡していた。



市場でお布施を集める小坊主 ▶



◀ タビニュー寺院
▼ プー・パヤー



その他、高さ65mでバガンでもっとも高いタビニュー寺院、エーヤワディー川沿いに建つ丸い仏塔のプー・パヤーなど多くの仏塔を巡りパゴダを味わい尽くした。それぞれに納められている仏像が表情豊かで違っているのが興味深かった。また、首の長い民族が仏塔の側で機織りを実演していたが、バガンには立派な博物館もあり、まだまだ知らないことがたくさん存在する魅惑のエリアだった。



関取のような仏像 ▶
首が長い民族 ▼



4 ヤンゴンのパヤー



▲ シュエダゴオン・パヤー

25日はH I Sの一日観光を予約していたので、朝ホテルを出発しそのまま夜の帰国便に乗りこむという強行日程だったが、かなり効率的に市内を回ることができた。

ヤンゴンで一番魅力的だったのは、市街北部のシングッタヤの丘に建つシュエダゴオン・パヤーで、国内外から大勢の善男善女がお参りに訪れるという。大きな金色に輝く仏塔の周りは所狭しと小さなパゴダが建っていて、どれも金箔が張り尽くされていた。この塔は500年程前に完成したもので、仏陀の聖髪8本が納められているという歴史をもつ。パゴダへお参りをするときはずっと素足になるが、参拝者のために信者団が一行になって幕を持って清掃をしていた。パヤーの衛生状況も信心深い国民の奉仕によって支えられているのだ。周辺のパゴダの中に入ってみると、たくさんの仏像が置かれていて、日本の日常から察すると想像を絶するくらい仏像にばかり囲まれている状況なのだ。



▲ 清掃奉仕の参拝者



▲パゴダ内部



◀小パゴダの内部
▼チャウッターデー・パヤー

また、チャウッターデー・パヤーでは大きな屋根の下に全長70mの優美な涅槃像を拝観。足の裏には黄金の仏教宇宙観図が描かれていて見事だった。これまで見た涅槃像の中では最大だったが、釈迦の顔が異様に男前で、庶民的にさえ思えた。

市内で昼食を摂った後、ダウンタウンのパンソダン埠頭からヤンゴン川を船で渡り対岸の町ダラへ行ってみた。自転車タクシーに乗り町中を一回りして、市民の暮らしぶりを見ることができた。首都ヤンゴンへは10分もあれば行けるのだが、ダラには農地も広がり、素朴な田舎町だった。運転手はペダルを漕ぎながらしきりに、「自転車はしんどいのでバイ

▼チャウッターデー・パヤーの涅槃像



クを買って欲しい」と何度も懇願したが、それはお断りして最後は爽やかに別れをした。いつも言っているのだろう。なおこの船は日本の経済協力で運航されていて、パスポートを見せると日本人は運賃が無料となった。



▲ヤンゴン川の渡船

▼自転車タクシー



5 ミャンマーへの思い



◀ ヤンゴン中央駅ホーム

▼ 乗車した列車



ヤンゴンの鉄道は、JRの旧車両がそのまま走っていた。中央駅のホームには会津若松や奈良、岐阜とか行き先が表示された車両がそのまま停車していた。親しみを感じることもあるが、過去の国と国の歴史に思いを馳せた。列車に乗ってみると、これは車両と線路の整備が遅れているためか兎に角遅い。沿線には住宅が建ち並び、南国の庶民の生活も垣間見ることができた。

訪問時はロヒンギャ難民が問題になっている時期で、アウンサンスーチー氏の対応が国際的に非難を浴びていて、国民がどう感じているのか疑問だった。

しかし、ガイドの薦めでスーチー氏が自宅軟禁されたNLD（国民民主連盟）となっている家の門へ案内され難民問題の考えを訊ねると、全く自分が思っていたのと逆の答えが返ってきたので驚いた。日本では正反対に報道されていたのであり、国民の絶大な信頼と心の底からの期待がスーチー氏にあったのだ。

現在は軍事政権と民主派の対立が続いていて鎖国のような状態のミャンマーだが、早く平和と安定を取り戻し、以前のように自由な往来ができるようになることを祈るばかりだ。

NLDの入口▶
▼ ヤンゴン市民の住宅



文化財・まちづくり委員会より

文化財まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和

1. 令和3年度活動報告

(1) 委員会会議

ZOOM会議での会議を10回行った。また、全体会議を7月にZOOMで、また12月に建築士会館で行った。そのほか、ヘリテージマネージャーについての会議を行った。

(2) 勉強会・見学会

ヘリテージマネージャー勉強会(西予市：龍澤寺・芝家)を10月16日に行った。いしづちNo.144 2022年1月号にて報告

歴史・文化財部会勉強会(大洲市：NIPPONIAホテル 盤泉荘)を11月28日に行った。いしづちNo.145 2022年3月号にて報告

(3) まちづくり委員長会議に参加

中四国まちづくり委員長会議：11月13・14日山口県にて開催。峰岡委員長参加。いしづちNo.145 2022年3月号にて報告

全国まちづくり委員長会議：2月19日WEBにて開催。峰岡(以下敬称略)参加

(4) その他会議に参加

えひめ文化財等防災ネットワーク講演会：9月17日WEBにて開催。峰岡参加

第9回全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会総会：11月19日WEBにて開催。峰岡・花岡参加

(5) 企画事業報告

景観写真コンテスト：7月から12月募集。対象：愛媛県建築士会正会員・準会員・賛助会員。応募総数37点。3月9日 特賞1点、入賞4点、佳作1点、入選2点を選考(会長・副会長・北村審査委員長ほか計9名)。いしづちNo.146 2022年5月号にて報告)
良質な建築・美しい街づくりの仕組、萌芽事例報告：

7月から12月まで募集。6事例が集まったが、応募が少なく、報告会を断念。来年度も継続して集めていきたい。

2. 令和4年度活動予定

(1) 委員会会議

例年どおり通常はZOOM会議を行うが、今年は顔を合わせて集まれる機会を多くとりたい。なるべく多く、生の意見を取り入れたいと考えている。また、例年行っていた委員会内での勉強会も行いたい。

(2) 委員会活動

今年はコロナとの共存の考え方も進んでいるため、現地にて調査活動を行ってほしいと思う。前年度、新宮での神社の事前調査を行ったので、令和4年度は少し掘り下げて調査を継続したい。また、ヘリテージマネージャー協議会の勉強会の開催や、市民を対象とした見学会を行いたい。

さいごに

令和3年度はコロナ禍でありながら、感染が落ち着いた時期に勉強会・見学会をすることができました。また、年末に建築士会館で委員の顔を見ながら総会を行えたことは有意義だったと感じています。この様に上手に感染と付き合いながら、少しでも多く活動ができた事は、令和2年度に比べて前に進めたのではないのでしょうか。

一方、企画事業していた内容について、思ったほどの成果が得られませんでした。様々な点で未熟であり、協力してくださった会員の皆様に対しお詫び申し上げます。また、ご協力くださった情報広報委員会の方々、事務局の皆さん、大変ありがとうございました。しっかりと反省し、令和4年度に生かしていく所存です。

こどもと建築をつなぐ絵本

青年委員会 委員長 和田 崇

令和3年度、中四国ブロック青年建築士協議会では、新型コロナウイルスの影響で活動が制限されたことを受け、使うことが出来ていなかった予算を利用して、石川県建築士会青年委員会が作成した絵本「おばあちゃんのまちや」を購入し、各県で幼稚園や保育園に配布することになりました。

この絵本は金澤町家を舞台に、少年がおばあちゃんの住む家でかくれんぼをしている間に、様々な妖怪に出会うという話で、その中で建築の工法や用語を学べるように工夫されています。

愛媛にも絵本が届き、支部ごとに青年委員で手分けして各園に配布しました。(青年委員のみなさん、ありがとうございました。尾藤副会長にもご協力いただきました！)

先が見えにくいコロナ禍で、こどもたちとの対面での活動も難しい時期が続いていますが、ずっと手元に残る「絵本」という形でこどもたちと建築をつなぐことが出来れば嬉しく思います。



仕事と農業との両立

松山支部 菅野 林次

渡部聡さんからのバトンタッチです。

2年前に還暦を迎え、今年の8月には62歳になります。現在は夫婦2人の生活で、子供は3人ですが3人とも県外で働いており、故郷に戻る気配は今のところありません。そのような状況の中、昨年の12月から犬を飼い始めました。いたずら好きな犬に毎日振り回されていますが楽しい日々を過ごしています。

【現在】私は18歳から勤務している建築士事務所の役員、そして地区の中山間関連（国の農地保全環境等の補助事業）の地区代表、消防団の分団長、市から任命されているスポーツ推進員副委員長など幾つかの役をしています。少しでも地域に貢献が出来ればと、自身への活力になればとも思ってお受けしている次第です。

今回の投稿依頼を受けて何について投稿しようかと考えましたが、身近なところで農業関連について投稿しようと思います。農地は先祖から引き継いだ田畑5反と近所の方からお借りしている2反を合わせて7反の農地を管理しています。これは愛媛県内では稲作農家1戸当たりの平均より少し広い面積です。その内の5反は稲作、残りの農地は自家用の野菜栽培と、あとは草刈りのみの管理です。生活の盾は会社勤めなので、基本的には土日及び祝日を利用しての農地管理になります。ただ、限られた時間での農作業なので体力的にはかなりキツイです。過去には熱中症になってしまい、緊急搬送されたこともあります。それ以来、夏場は朝6時頃から午前11時までと少しでも涼しい時間帯で無理をしないよう気をつけています。このような状況でも農業が可能なのは、主が稲作だからこそです。基本的に稲作は田植え後の水管理さえしておけばまずOKなのですが、これが野菜栽培となると除草、害虫駆除、摘果、収穫、出荷作業と多く手間が掛かり休日だけでは不可能です。

そして今般の最大の問題として、よく耳にすることと思いますが害獣被害で、ここ10年の間で身近な場所にも被害が広がっています。害獣被害は以前からも発生し、それは山中の農地に集中しており、民家の周りの農地への被害は殆どありませんでした。代表的な害獣として猪、ハクビシン、サル、鹿、カラスなどです。写真①のように民家横の農地にも頻繁に出没することが多くなりました。対策なしでは農作物は人間の口には入りません。対策として電柵設置でバッテリー式と乾電池式がありますが、比較的安価な乾電池式電柵を周囲に設置しています。写真②のようにすごく簡単な器具で単1アルカリ電池4個を使用している電柵ですが、触れると肩口まで衝撃があります。このような対策を講じないと害獣の餌となってしまう、良い農作物はできません。このように対策費

が掛かるので結果的に高い野菜となります。それでも自身が栽培可能な限り減農薬で栽培した野菜は格別です。今後も害獣との攻防はずっと続き人間との知恵比べです。そして、野菜は手間をかけるほど良いものが出るのも間違いありません。皆様が良く産直市で購入される野菜はこのように多くの労力をかけた野菜が店頭に並んでいるのです。自身も将来は産直デビューしたいと思いついています。

宣伝になりますが、この河之内地区は愛媛県内でもおいしいお米が出来る地域です。圃場整備された棚田で令和3年の農水省の棚田100選にも認定されました。三内米としてブランド化も図り、実績として近所の稲作専業農家さんは、毎年全国コンクールに出品され検体約6,000点の中で最高峰の金賞は20点ほどとハードルの高い金賞に2020年と2021年と2年連続で受賞され、全国的な評価をされています。

私の農地もその方と隣接しており私の栽培するお米も毎年食味検査に出して100点中85点前後と自分でも良いお米と自負しております！ その最大の要因は自然環境が生み出す寒暖差と水です。水はダム用水やため池の水ではなく全て川の流水です。ただ、水不足の心配は毎年のようにあります。栽培したお米は全て知人の方に購入して頂いています。令和2年はコロナ禍で自宅での消費が増え追加購入の希望の方もいましたが、在庫がなくなるなど、米不足を初めて経験しました。

これからも仕事との折り合いを付けながら農業を続けていきます。最後に、コロナ禍で不自由な日々が続きますが、平穏な日常を少しでも早く取り戻せるよう感染予防対策に一層心掛けましょう。……今回の投稿の機会を頂きありがとうございます。

次は西山ゆかさんにバトンタッチします。



▲①民家横の畑



▲②電柵設置



▲棚田風景

宇和島支部 藤井 英樹

豊田さんよりバトンを受け取りました、宇和島支部の藤井です。1962年生まれ、現在宇和島市内で設計事務所を営んでいます。

建築士会には27歳頃ごろだと思いますが、独立して事務所開業後すぐに先輩方に強制入会させられました。まだ2級建築士で住宅設計が多く、確認申請業務がほとんどでルーティンワークのような今一達成感のない、もちろん頂いた仕事はありがたいのですが、物足りなさを感じていました。記念すべき設計監理物件第1号は歯科医院でした。松山勤務から宇和島に開業するという事で依頼頂き、同世代という事もあり設計業務は大変充実した時間でした。計画から工事竣工まで自分一人で設計監理してゆく大変さも経験し、特に現場では厳しい指摘も受け未熟さを痛感しましたが、やりがいを感じました。そして30年後その子供さんが後を継ぐという事で設計依頼頂き、今回は経験を生かしてと意気込んでいましたが、ジェネレーションギャップ……という事で設計の仕事は最後まで勉強ですね。この件もそうですが、やはりご縁というものがある、それを常に生かすよう心がける事が大切だと実感します。仏教用語で「多くのご縁によって生かされている」素敵な教えがあります（浄土真宗）。どっかの国の大統領に聞かせたいです。

20年程前、現事務所に移動し、といっても戦前に建てられた古い木造民家ですが、リフォームし今に至っています。この時裏にあった倉庫を解体し10坪程の中庭を作りました。正面にノムラモミジとイロハモミジ、脇にキンモクセイ、エゴ、ツバキ、サザンカ、ナンテン、ドウダンツツジ、ヤマブキ、キンメモウソウチク、蹲、井戸縁石につるべ落としも設置し敷石3帖程度、足元にスギゴケ、タマリユウ、シャガ等、春は結構賑やかです。一からでしたので最初の年はさほどでもなかったのですが、雑草との戦いが始まりました。

中でもドクダミとカタバミが難敵で今も戦っています。漢方としても使用されお茶として飲む方もいるそうですが、とにかく私にとっては憎い奴なのです。モウソウチクも横に根を張ってきてほかの植栽に被害を及ぼすようになり撤去。美しさは人が手をかけないと保てない、やってみて様々な事を経験し庭師さん達の苦労が少し分かるような気がします。その時ハマってしまったのがスギゴケです。偶然なのか5年程何の問題もなく育ち美しく可憐な姿で私を癒してくれていたのですが、突如病気なのか全滅してしまいました。苔の植替えをして夏場は毎日水をやり、晴れた日はメッシュシートで日陰を作りピンセットで草引きをし、話しかけ…それでも以前の光景にはもどりません。ゼニゴケも厄介で早く見つけないと浸

食されます。梅雨時期は外に出て管理ができない日が続きます。蚊は出るし蒸し暑いし、この頃苔や雑草たちは勢いよく育ちます。ここが踏ん張りどころです。そして猫、何故か苔の上に糞をするのですが、1日放置すると廻りが枯れてしまいます。スギゴケをゼニゴケ、ハイゴケ、雑草そして猫達から守らないと。過保護と言われようが私がやらないと奴らにやられてしまうのです。苔は日本に1600種生息しているそうですが、私はスギゴケ命です。新緑に生命を感じ、紅葉、雪化粧も綺麗です。

以前より植栽に関心が深まってきているように思います。温暖化で環境に興味がとかコロナで癒しを求めてとか理由はともあれ大変良い事だと思っています。特に住宅のオーナーさんには植栽を強引に勧めていますが、最近芝生に多肉植物というお話が出るようになりましたが、時代ですね。我が家のベランダも結構占用されてます。冒頭の歯科医の子供さんとシンボルツリーの話の中で、モウソウチクを植えたいと予期せぬ言葉に、ご両親は必死で説得されてましたが、何となく微笑ましくまた「ご縁」というものを感じ、エールを送りたい気持ちになりました。

次回は池田千代一さんをお願いします。



▲中庭です